不登校傾向におけるストレスサー とソーシャル・サポートの研究

専修大学大学院文学研究科
菊島 勝也¹⁾

The Study of Stressors and Social Support on the Tendency towards Non-Attendance at School

Katsuya Kikushima

(Department of Psychology, Graduate School of Letters, Senshu University,
Higashimita, Tama-ku, Kawasaki, Kanagawa 214-80)

The purpose of this study is to investigate the structure of stressors and social support on the student's tendency not to attend school. We conducted a survey among 444 students of colleges and special training schools about the stressors and the social support they had when in high school. The tendency school non-attendance was classified into three groups: A: The absence of motivation to attend school, B: Incomplete attendance of school, C: Non-attendance of school.

The major findings were as follows: (1) The three groups suffered from heavy stress. (2) Those in groups A and C felt that they got less social support than the control group. (3) A model we made of the grounds for the tendency towards school non-attendance indicated that: 1. "Companionship and group-behavior stress" and "teacher-related stress" directly effected the tendency towards school non-attendance; 2. "Parent-related stress" and "study-related stress" indirectly effected the tendency towards school non-attendance; and 3. Social support had both a direct and indirect buffering effect for the tendency towards school non-attendance.

Key words: tendency towards school non-attendance, stressor, social support

問題と目的

現在我が国では、不登校の増加が指摘されているが、それと共に、登校はしているものの、学校に対して強い登校忌避感情を有している者や、登校忌避感情

によって欠席しないまでも遅刻や早退を繰り返したり、短期間の欠席をしている者も存在していると考えられる。これまで行われた調査では、このような不登校傾向にある児童・生徒が高率に存在していることが明らかになっている（古市，1991；池田・上林・河野・西川，1986；圓山・西，1992；森田，1991；高橋他，1988；渡辺，1988）。

1) 本研究をまとめるにあたり、ご指導いただきました専修大学教授森武夫先生、また貴重なご助言をいただきました専修大学教授岡部祥平先生に深く感謝いたします。

それでは、不登校・不登校傾向という現象は、どのようにして生じてくるものなのであろうか？この問題について、説明モデルとして心理的ストレス理論を援用することは一つの有効なアプローチであると思われる

る。Lazarus & Folkman (1984) の心理的ストレスモデルからみると、不登校・不登校傾向は、様々な日常生活上のストレッサーに対する反応、すなわち Lazarus & Folkman が示唆しているような、ストレッサーに遭遇した結果としての社会的機能やモラルの低下としてみなしうる。さらに、不登校・不登校傾向にあるものは、自殺願望や抑うつ・不安・身体症状などの深刻な心身の問題を呈していることが指摘されている（圓山・西，1992；上林他，1990；渡辺，1988）。一方ストレッサーとは、個人に不快感や脅威を感じさせる出来事である。またストレッサーとストレス反応の代表的な媒介要因の一つに、ソーシャルサポートがある（Cobb, 1974）。ソーシャルサポートはストレスの悪影響を和らげる効果や、心理的健康状態との関連性が注目されており（Winfield, Winfield & Tiggemann, 1992など）、不登校・不登校傾向に対する緩衝効果（Cohen & Wills, 1985）を明らかにすることは、臨床的にも有効であると思われる。

現在、児童・青年期を対象としたストレッサーの測定尺度については測定方法が統一されておらず、様々な方法が行われている。これまでのところ、Coddington (1972) や Yeaworth et al. (1980) の研究に代表されるような、ストレスフルと考えられる出来事の生起のみを問題としているもの、また、実際の経験を問わずにストレスフルと考えられる出来事に対する個人の不快度のみを検討しているもの（三川，1991；長根，1991）、さらに個人のストレッサーの経験の頻度と不快度を両方含めて検討しているもの（岡安・嶋田・丹羽・森・矢富，1992）という3つの立場が存在している。Lazarus & Folkman (1984) に従えば、ある出来事（刺激）に対して個人が脅威的であると判断した時に、その出来事はストレッサーとして成立するといえる。このことを考慮に入れるならば、不登校・不登校傾向にある者に特徴的なストレッサーを測定する場合、日常生活上の出来事に対する、経験頻度と不快度の両方を含めてストレッサーとする必要があるといえる。児童青年期における不適応や精神疾患とストレスとの関係についての研究はいくつか行われており（Coddington, 1972；森岡他，1991など）、不登校・不登校傾向の要因としてのストレス問題もす

で指摘されている（皿田，1992；富田，1992；頼藤，1994）が、実証的な研究は残念ながら非常に数少ない。古市（1993）は、一般中学生の登校忌避感情と学校におけるストレスフルな出来事の実験の有無について調査を行い、登校忌避感情と関連のある学校ストレッサーとして、授業、行事、部活動を挙げている。立木（1994）は一般中学生における欠席傾向と学校生活状況で生じる不安度、家族の健康度についての調査を行い、欠席傾向と学校ストレッサーの生成機序についてモデル化を行っている。これら2つの研究では、ストレッサーの領域として学校でのストレッサーのみを扱っているが、これまでの不登校・不登校傾向についての臨床場面からの事例報告や調査研究をみても、学校以外の問題、とりわけ家族関係の問題が不登校・不登校傾向の背景に存在していることは指摘されていることであり（村瀬，1988；大河原，1994など）、学校におけるストレッサーだけでなく、家庭を含め日常生活全般にわたるストレッサーを検討する必要があると思われる。

ソーシャルサポートには、他者からの援助についての主観的評価である知覚的サポートと、個人の持つ対人関係のつながりの大きさである社会的ネットワークがある（Lazarus & Folkman, 1984）。この2種類のサポートにおいて、岡安・嶋田・坂野（1993）が指摘しているように、児童青年のソーシャルサポートの微妙な個人差を反映するためには、実際の量的側面を重視する社会的ネットワークよりも、個人の主観的な援助もしくは援助可能性を測定する知覚的サポートが適しているといえる。児童青年期におけるソーシャルサポート研究では、心理的健康状態との関連があること（Garmezy, Masten & Tellegen, 1984；嶋，1994）、また学校ストレスの軽減効果についてもソーシャルサポートが有効であること（Elias, Gara & Ubriaco, 1985；岡安・嶋田・坂野，1993）が確認されている。これらのことから、不登校・不登校傾向に対する緩衝効果としてのソーシャルサポートの有効性が予測されるが、実証的な研究は行われていない。

そこで本研究ではこれらの問題点を踏まえ、今回は高校時代における不登校傾向の外的要因として、どのようなストレッサーが存在しているのか、またソーシ

サルサポートはどのような状態にあるのかを明らかにするとともに、不登校傾向に対するストレスの影響と、ソーシャルサポートの緩衝効果についてモデル化して検証することを目的とする。不登校傾向の外的要因であるストレスの影響を明確にし、不登校傾向に陥らないためのソーシャルサポートの効果を検証する事は、臨床的にも一つの手がかりとして有用な事であると考えられる。

方 法

被験者と手続き

4年制大学の1・2年生及び専門学校1年生の486名で、各自の高校時代について以下に述べる質問紙に回答してもらった。有効回答としては、444名（男子226名、女子218名、平均年齢18.7歳）を得て、これを分析対象とした。

なお本研究ではレトロスペクティブなアプローチを研究方法として採用した。不登校状態にある生徒は自らの不登校の誘因・原因や葛藤をなかなか意識化することができないという特徴が指摘されている（本城，1996；松本他，1982）。そのために質問紙調査を行うことにはある程度の限界はあると思われるが、現に不登校傾向に陥っている生徒に対して調査を行うよりも、高校時代を終えてから、自らの高校時代をふりかえってみるというアプローチの方が自らの体験をより意識化でき、自己評価しやすいということが考えられる。ただし、レトロスペクティブなアプローチの限界として、記憶の変容や忘却の問題があり、また、本研究の対象者は一般学生であるため、不登校傾向からの克服者という意味で、不登校傾向者全てをカバーできていないという点もあり、本研究結果もこれらの制限を考慮に入れてみなければならないであろう。

質問紙

質問紙は以下の3尺度によって構成された。

1. ストレッサー尺度 児童青年期を対象としたストレッサー尺度（Yeaworth, York, Hussey, Ingle & Goodwin, 1980; Elias, Gara & Ubriaco, 1985；三川，1988；堂野，1990；森岡他，1991；長根，1991；岡安・嶋田・丹羽・森・矢富，1992；朝倉，1993）を参

考に、高校生に日常的に生じられるような出来事からなる、43項目のストレッサー項目を作成した。回答方法としては、その出来事に関する経験頻度（よくあった～なかった）の3段階と、不快感（非常に嫌だ～全然気にならなかった）の6段階について回答させる。これについて、岡安他（1992）と嶋（1992）の方法に従い、経験頻度と不快感を掛け合わせたものをストレス度として算出した。

2. ソーシャルサポート尺度 児童青年期を対象としたソーシャルサポート尺度（岡安・嶋田・坂野，1993；友田・北村，1994）を参考に、6項目のソーシャルサポート尺度を作成した。この尺度では、自分の心情を理解してもらうという情緒的サポートと、具体的なアドバイスや援助を受ける道具的サポート（Leavy, 1982）について、親・教師・友人知人それぞれから、本人が知覚している援助資源の有無を測定する。

3. 不登校傾向尺度 不登校傾向を測定するために3項目の不登校傾向尺度を作成した。渡辺（1988）、圓山・西（1992）の研究を参考に、「学校が嫌だと思う」ことが「よくあった」と回答したものを不登校感情群、「学校が嫌で遅刻早退」を「よくした」と回答したものを遅刻早退群、「学校が嫌で休んだ」ことが「10日以上あった」ものを不登校群、それ以外のものを一般群とした。

以上の3尺度について、事前に大学院生、大学生30名に施行し、内容的に不十分な点やワーディングに関して指摘してもらい、修正を行った。

結果と考察

尺度の信頼性

ストレッサー尺度、ソーシャルサポート尺度、不登校傾向尺度の3尺度の信頼性を検討するために、G-P分析と信頼性係数（Cronbachの α 係数）の算出を行った。G-P分析では、全ての項目で有意差が認められ（ $p < .0001$ ）、 α 係数では、ストレッサー尺度で.90、ソーシャルサポート尺度で.73、不登校傾向尺度で.76であり、3尺度ともほぼ等質性及び内的一貫性に問題はないといえる。

菊島：不登校傾向におけるストレッサーとソーシャル・サポートの研究

Table 1 ストレッサー尺度各項目のストレス度：群別の平均得点と標準偏差

ストレッサー項目	MSe	不登校感情群	遅刻早退群	不登校群	一般群
授業の内容に興味を持てなかった	18.34	8.1(4.58)*	5.9(4.93)	6.6(4.85)	6.4(3.92)
何か気の合わない先生がいた	22.03	7.6(4.80)*	6.4(5.36)	7.7(5.68)*	5.9(4.24)
授業の内容がわからなかった	16.89	8.5(4.50)*	6.8(5.00)	6.6(4.28)	6.8(3.81)
親が自分の要求を聞き入れてくれなかった	15.91	6.6(3.60)*	7.0(5.04)	6.7(4.95)*	5.3(3.63)
自分の容姿、体重が理想と違った	24.85	9.0(5.15)	10.7(4.99)*	8.1(4.73)	8.3(5.01)
家のきまりを守らなければならなかった	17.56	4.9(4.34)	5.9(4.64)	5.7(4.49)	4.6(3.99)
友達に誤解された	12.89	5.7(3.75)	5.2(3.77)	6.0(3.79)*	4.8(3.46)
クラス役員や委員会の仕事	11.56	3.7(2.94)	5.3(4.27)*	4.5(4.03)	3.7(3.20)
学校の行事などで、集団で行動	16.40	5.8(4.24)*	7.3(4.92)*	6.2(4.47)*	4.2(3.73)
服装や髪型など校則を守るよう注意された	24.02	6.5(5.30)*	6.5(5.63)	6.9(5.32)*	4.7(4.54)
親に叱られた	16.84	6.0(3.74)	6.1(4.59)	6.6(4.53)	5.8(4.01)
友達から自分の悪いところを指摘された	9.21	4.6(3.36)*	5.0(4.58)*	4.6(2.88)*	3.5(2.72)
仲の良かった友達とうまくいかなかった	13.99	6.2(4.41)	5.9(4.54)	5.3(3.95)	4.4(3.33)
朝起きてからの登校の準備が面倒だった	25.14	8.4(5.31)*	10.6(5.36)*	8.2(5.36)*	5.8(4.88)
家の手伝いを頼まれた	12.13	4.2(3.10)	4.5(4.68)	4.5(4.11)	4.0(3.22)
友達とけんかをした	11.70	4.6(3.29)	5.4(4.11)	5.5(4.03)	4.5(3.17)
自分の話を友達が聞いてくれなかった	11.75	4.9(3.89)	5.3(3.34)	4.3(4.02)	3.9(3.10)
親と意見が合わなかった	16.38	7.0(4.23)*	7.0(4.95)*	6.4(5.17)	5.2(3.46)
先生に叱られた	14.42	5.2(3.84)	6.2(4.27)	6.1(4.78)*	4.6(3.39)
親が自分を理解してくれなかった	16.57	6.7(4.29)*	5.4(4.70)	6.1(4.95)	4.9(3.62)
睡眠、食事などの生活が不規則になった	20.57	5.8(5.01)	4.5(4.82)	5.3(4.83)	5.1(4.26)
親が自分のことを過度に期待していた	20.40	6.1(4.68)	5.1(4.85)	6.3(4.76)	5.4(4.35)
やりたいことがなく、退屈だった	18.25	6.7(4.76)*	6.3(5.04)*	6.5(5.23)*	4.4(3.66)
異性関係がうまくいかなかった	21.08	6.4(4.90)	7.6(4.88)	6.0(4.88)	5.8(4.37)
テスト前の勉強をしなければならなかった	19.27	11.4(4.12)*	9.6(4.88)	10.4(4.37)	9.7(4.41)
クラス替えがあった	15.17	5.6(4.47)*	4.7(4.67)	3.3(3.07)	4.4(3.81)
授業中「静かにしなさい」と注意された	11.06	4.2(3.71)	3.8(3.18)	4.3(3.61)	3.7(3.13)
学校でいじめられた	7.01	3.2(3.12)	3.2(2.66)	2.9(2.89)	3.0(2.41)
先生から納得できない扱いをうけた	16.66	5.3(4.07)	6.8(5.26)*	6.5(5.29)*	4.6(3.48)
学校で気の合わない人達と一緒に行動	16.34	5.7(4.09)*	7.3(5.06)*	5.7(4.57)*	4.4(3.71)
自分の将来のことについて悩んだ	21.23	7.7(4.52)	6.9(5.29)	6.9(4.93)	6.8(4.45)
塾、お稽古ごと、スポーツ教室に通った	13.67	4.1(3.93)	3.4(3.19)	4.0(3.86)	3.5(3.64)
おこずかいが足りなかった	24.21	7.1(4.93)	7.5(5.29)	7.7(5.56)	6.8(4.67)
自分以外の家族の中でもめ事が起きた	16.91	5.2(4.25)	6.0(4.49)	4.9(4.80)	4.3(3.80)
成績が下がった	18.17	7.2(4.57)	6.1(4.95)	6.4(4.56)	6.1(3.98)
自分のことに親が干渉してきた	20.27	7.0(4.38)	5.9(4.98)	6.8(5.37)	5.8(4.20)
友達の話についていけなかった	12.53	5.5(4.15)	4.7(2.80)	4.0(3.52)	4.4(3.43)
部活・クラブの練習が厳しかった	17.91	4.9(4.42)	5.8(5.43)	4.2(4.24)	4.0(4.0)
気の合う友達がなかなかできなかった	13.70	6.0(4.61)*	5.5(4.31)	4.9(4.57)	3.9(2.97)
先輩や後輩とうまくつきあえなかった	11.19	3.4(3.46)	5.0(3.87)*	3.9(4.33)	3.4(2.89)
自由な時間が少なかった	20.27	6.4(4.33)	7.8(5.31)*	6.5(4.74)	5.7(4.37)
自分自身の性格について悩んだ	22.38	8.7(5.00)*	8.8(5.32)*	7.7(4.57)	6.3(4.61)
友達に嫌な思いをさせてしまった	14.47	6.9(4.15)	6.6(4.23)	6.5(4.08)	6.2(3.55)
総合得点	5616.43	264.4(65.59)*	267.1(82.39)*	254.2(83.41)*	218.9(74.05)

*=p<.05

Table 2 ソーシャルサポート尺度：群別の平均点と標準偏差

	MSe	不登校感情群	遅刻早退群	不登校群	一般群
アドバイスや手助けしてくれる家族	0.08	1.8(0.40)*	1.9(0.33)	1.9(0.34)	2.0(0.21)
話を聞いて気持ちを分かってくれる家族	0.16	1.7(0.44)	1.8(0.44)	1.7(0.46)*	1.8(0.37)
アドバイスや手助けしてくれる友人知人	0.24	1.4(0.49)*	1.5(0.51)	1.5(0.50)	1.6(0.49)
話を聞いて気持ちを分かってくれる友人知人	0.09	1.8(0.38)	1.9(0.24)	1.9(0.33)	1.9(0.27)
アドバイスや手助けしてくれる教師	0.20	1.6(0.49)*	1.6(0.50)	1.6(0.50)*	1.8(0.41)
話を聞いて気持ちを分かってくれる教師	0.23	1.2(0.40)*	1.3(0.48)	1.4(0.50)	1.5(0.50)
総合得点	2.46	9.6(1.55)*	10.0(1.78)	9.9(1.80)*	10.6(1.47)

*= $p<.05$

ストレッサー尺度項目得点の比較

不登校感情群は78名、遅刻早退群は33名、不登校群は74名であった。不登校傾向3群にどのようなストレッサーが存在しているのか明らかにするために、これら3群と一般群で、ストレッサー尺度43項目のストレス度について分散分析を行った。Dunnnett法を用いた多重比較の結果、一般群と比較して有意差のみられた項目についてTable 1に示した。まず、一般群と比べ不登校感情群、遅刻早退群、不登校群の3群とも有意($p<.05$)にストレス度の高かった項目をみると、総合得点及び、「学校の行事など集団行動」、「友達から自分の悪いところを指摘された」、「朝起きて登校の準備が面倒」、「やりたいことが無く退屈」、「気の合わない人達と一緒に行動」となっている。このことから、一般群に比べて不登校傾向3群に共通していえることは、生活全般でより多くのストレッサーがあり、特に学校における集団行動や決まった時間に登校することなど、学校生活上要請される行動の規範や義務がストレッサーとなっていることが認められる。これは、日本の不登校には日本社会の社会的規範の圧力の強さが影響しているという、Young et al. (1990)の指摘と一致するものである。またその一方で、自分自身の「やりたいこと」が見つからないということもストレッサーとなっている。つまり、外から押しつけられることに反発を感じながらも、自分のやりたいことも見つからないといった葛藤状況におかれていると考えられる。

また、「友達から自分の悪いところを指摘される」ことがストレッサーとなっており、対人関係における傷つき易さが影響していると推察される。次に、一般

群に比べ各群ごとに有意($p<.05$)に高かったストレッサー項目を内容的に要約してみることとする。不登校感情群では、「仲の良かった友達とうまくいかなかった」など友人関係に関するものが5項目みられ、友人関係が大きなストレッサーとなっている。また、「授業の内容に興味を持てない」など学業に関するストレッサーが3項目あり、これは前述の学校生活上の義務に対するストレスをより強めていると思われる。また「親と意見が合わなかった」など親との関係におけるストレッサーも2項目みられ、家庭でもストレスを強く感じていることが認められる。遅刻早退群では、3群の中で唯一「自分の容姿、体重が理想と違った」という項目が有意に高く、さらに「友達から自分の悪いところを指摘された」、「自分自身の性格について悩んだ」を含めて、自分自身に関係するストレッサーが3項目認められ、自己に対して不快感を有していることが推察される。さらに、「クラス役員や委員会の仕事」、「先輩後輩とうまくつきあえない」というように、学校生活での役割がストレッサーとなっていた。不登校群に特徴的なストレッサーとしては、「友達に誤解された」など、友人関係に関するものが4項目あり、やはり重大なストレッサーとなっている。また、「先生に叱られた」など教師との関係におけるストレッサーが4項目あり、3群に共通してみられた学校生活上の圧力に、不登校群では教師との関係におけるストレッサーが加わっているといえる。このように、友人関係や勉強、学校における様々な規範や教師、親、自己に対する不快感など、不登校傾向にみられる大きなストレッサーは、いずれも青年期に特徴的なストレッサーといえ、現代の青年をとりまくストレ

Table 3 3 尺度の Promax 回転後の 7 因子

因子1 対親ストレス		因子4 ソーシャルサポート	
1 親が自分の要求を聞き入れてくれなかった	0.79	20 アドバイスや手助けしてくれる家族	0.78
2 家のきまりを守らなければならなかった	0.66	21 話を聞いて気持ちを分かってくれる家族	0.76
3 親に叱られた	0.71	22 アドバイスや手助けしてくれる友人知人	0.44
4 親と意見が合わなかった	0.79	23 話を聞いて気持ちを分かってくれる友人知人	0.73
5 親が自分を理解してくれなかった	0.75	24 アドバイスや手助けしてくれる教師	0.67
6 自分のことに親が干渉してきた	0.73	25 話を聞いて気持ちを分かってくれる教師	0.43
因子2 対友人ストレス		因子5 対教師ストレス	
7 友達に誤解された	0.70	26 何か気の合わない先生がいた	0.48
8 友達から自分の悪いところを指摘された	0.56	27 服装や髪型など校則を守るよう注意された	0.61
9 仲の良かった友達とうまくいかなかった	0.70	28 先生に叱られた	0.63
10 友達とけんかをした	0.65	29 授業中「静かにしなさい」と注意された	0.63
11 自分の話を友達に聞いてくれなかった	0.60	30 先生から納得できない扱いをうけた	0.48
12 友達の話についていけなかった	0.46	因子6 不登校傾向	
13 自分自身の性格について悩んだ	0.44	31 学校が嫌だと思うことがあった。	0.57
14 友達に嫌な思いをさせてしまった	0.62	32 学校が嫌で遅刻や早退をしたことがある。	0.83
因子3 学業ストレス		33 学校に行くのが嫌で休んだことがある。	0.81
15 授業の内容に興味を持てなかった	0.62	因子7 集団行動のストレス	
16 授業の内容がわからなかった	0.68	34 クラス役員や委員会の仕事をしなければならなかった	0.53
17 テスト前の勉強をしなければならなかった	0.61	35 学校の行事などで、集団で行動しなければならなかった	0.64
18 自分の将来のことについて悩んだ	0.54	36 学校で気の合わない人達と一緒に行動しなければならなかった	0.55
19 成績が下がった	0.55		

ス状況をより極端な形で反映しているといえるだろう。

ソーシャルサポート尺度項目得点の比較

次に不登校傾向3群のソーシャルサポートはどのような状態にあるのかを明らかにするために、ソーシャルサポート尺度の各項目の比較を行った (Table 2)。この結果、不登校感情群は一般群に比べて、家族による道具的サポート、友人知人による道具的サポート、教師による道具的サポート及び情緒的サポート、及び総合得点が有意 ($p < .05$) に低かった。遅刻早退群では、一般群よりも平均得点の低い項目が7項目中6項目みられたが、いずれも有意とならなかった。不登校群では、家族による情緒的サポート、教師による道具的サポート、及び総合得点で有意に低いという結果であった。これらのことから、不登校感情群、不登校群はソーシャルサポートを受けることができるという実感に乏しく、不登校感情群では特に具体的なアドバイスや手助けをしてもらえるような援助資源に乏しいこと、不登校群では特に親に気持ちをわかってもらえないことや、教師からの具体的援助が乏しいと感じていることが明らかになった。

不登校傾向生成モデルの作成

不登校傾向に対するストレスの影響と、ソーシャルサポートの緩衝効果を明らかにするために仮説的モデルを作成し検証を行った。まず、不登校傾向尺度・ストレス尺度・ソーシャルサポート尺度の全項目に対して、素点を標準得点 (平均0、標準偏差1) に変換し、主成分分析によって因子抽出を試みた。その結果、7因子解を採用し、豊田・前田・柳井 (1992) の方法に従い、Promax 回転後、因子負荷量を得た。因子パターンにおいて.40以上の負荷量を示した項目から因子の解釈を行った (Table 3)。項目内容から、第1因子は「対親ストレス」、第2因子は「対友人ストレス」、第3因子は「学業ストレス」、第4因子は「ソーシャルサポート」、第5因子は「対教師ストレス」、第6因子は「不登校傾向」、第7因子は「集団行動のストレス」と命名した。この因子構造を参考に40以上の不登校傾向生成モデルを仮設し、共分散構造分析を行って適切と判断されるモデルを比較検討した。モデルの形式としては多重指標モデルを採用した。モデルの適合度の比較には、GFI (Goodness of Fit Index)・AGFI (Adjusted GFI) を参考に用いた。比較検討の結果、最も適切であると判断

されたモデルをパス図に表現した (Figure 1)。GFI は.81、AGFI は.79であり、このモデルがデータに適合していることを示している。影響指標及び因果係数について有意性の検定 (t 検定) を行ったところ、すべての影響指標及び因果係数で有意 ($p < .05$) となった。

このモデルでは、不登校傾向の直接的な要因となるストレスに学校における対人関係に関するストレス、すなわち「対教師ストレス」と、内容的に近いものと判断し合成した「対友人及び集団行動のストレス」が設定された。この2つの潜在変数から不登校傾向への標準化パス係数をみると、「対友人及び集団行動のストレス」に比べ、「対教師ストレス」のほうが高くなっており、教師との関係が不登校傾向により大きな影響を及ぼしていることが認められた。さらに、「対親ストレス」が「対教師ストレス」と「対友人及び集団行動のストレス」に影響を及ぼし、「学業ストレス」が「対教師ストレス」に影響を及ぼすというかたちで、不登校傾向の間接的な要因として直接要因の背後に存在している。それまでの家庭生活を通じて形成されてきた親子関係は、対人関係の在り方の基本となる関係であり、学校における対人関係にも影響を及ぼしていると考えられる。また、学業がストレッ

サーになっていることが、教える立場の教師との関係にも影響を及ぼしていることが推察される。「ソーシャルサポート」は不登校傾向に対して緩衝効果の2つの役割をもつと設定した。すなわち、強いストレスを体験した際に、ソーシャルサポートを受けることによりストレスが緩和され、ストレス反応である不登校傾向が生じることを直接的に防ぐはたらきと、一方でストレスフルな出来事に直面してもソーシャルサポートの存在によって強いストレスを体験せずに済み、間接的にストレス反応である不登校傾向に陥ることを防ぐというものである。

ソーシャルサポートからの2つの標準化パス係数をみると、ソーシャルサポートは不登校傾向に対しても、ストレスに対しても同程度に緩和する効果をもたらしていることが認められた。このことから、ソーシャルサポートの存在によって、遭遇した出来事のストレス度が低く評価され、不登校傾向が引き起こされることを予防する働きと、強いストレスを受けてしまった場合でもソーシャルサポートが衝撃度を緩和することで不登校傾向に陥ることを抑制するはたらきという、2通りの有効性が確かめられた。

Figure 1 不登校傾向生成モデル (係数は標準化パス係数、□内は項目番号)

要 約

本研究は、高校時代における不登校傾向の外的要因としてどのようなストレッサーが存在しているのか、またソーシャルサポートはどのような状態にあるのかを明らかにすることと、不登校傾向に対するストレッサーの影響とソーシャルサポートの緩衝効果についてモデル化して検証することを目的として、高校時代の不登校傾向、ストレッサー、ソーシャルサポートについて、レトロスペクティブな調査を行った。検討の結果、次の点が明らかになった。

1. 不登校傾向群（不登校感情群・遅刻早退群・不登校群）は一般群に比べて、生活全般でより多くのストレッサーがあり、特に学校生活上要請される義務的な行動がストレッサーとなる一方で、やりたいことがみつからないことにも退屈を感じるという葛藤状況にあることが明らかになった。その他に、不登校感情群では主に友人・勉強・親に関わるストレッサー、遅刻早退群では自分自身に関するストレッサーと社会的役割に関するストレッサー、不登校群では友人と教師に関わるストレッサーが認められた。

2. 不登校感情群・不登校群では一般群に比べて、ソーシャルサポートを受けることができると感じているものが少なく、不登校感情群では特に具体的なアドバイスや手助けをしてもらえる援助資源が少ないこと、不登校群では特に親に気持ちをわかってもらえていないこと、教師からの具体的援助が少ないと感じていることが明らかになった。

3. 不登校傾向生成モデルを作成し検証を行った結果、「不登校傾向」の直接的要因として「友人及び集団行動のストレス」と「対教師ストレス」が存在し、さらに間接的要因として「対親ストレス」と「学業ストレス」が不登校傾向の背後に存在していることが確認された。また「ソーシャルサポート」は、不登校傾向に対する緩衝効果として直接的及び間接的に緩和するという2つのはたらきをしていることが明らかになった。

今後の課題としては、今回はストレス過程における外的要因について調査を行ったが、パーソナリティ要

因やコーピングスタイルなど内的要因についても検討を加えていく必要がある。また、今回は高校時代について分析を行ったが、小学校、中学校における不登校傾向のストレッサー・ソーシャルサポートの分析により、各時代における不登校傾向の特徴を明らかにする必要があるであろう。さらに、本研究は一般学生における不登校傾向を対象としたものであり、実際に相談機関にかかるようなより重篤な不登校を含めたものではない。そのため、より重篤な不登校群についても検討していくことが必要であると思われる。

引用文献

- 朝倉隆司・有光由紀子 1993 大都市部における小学生の生活上のストレスと健康に関する研究 学校保健研究, 35, 437-449.
- Cobb, S. 1976 Social support as a moderator of life stress. *Psychosomatic Medicine*, 38, 300-314.
- Coddington, R. D. 1972 The significance of life events as etiologic factors in the diseases of children. *Journal of Psychosomatic Research*, 16, 7-18.
- Cohen, S. & Wills, T. A. 1985 Stress, social support, and the buffering hypothesis. *Psychological Bulletin*, 98 (2), 310-357.
- 堂野佐俊・田頭穂積・土江慎子 1990 児童期の心理的ストレスに関する一研究 広島文教女子大学紀要, 25, 165-179.
- Elias, M. J., Gara, M. & Ubriaco, M. 1985 Sources of stress and support in children's transition to middle school: an empirical analysis. *Journal of Clinical Child Psychology*, 14 (2), 112-118.
- 藤岡孝志 1996 学校のメンタルヘルスと「体験様式」 精神療法, 22 (4), 366-372.
- 古市祐一 1991 小・中学生の学校嫌い感情とその規定要因 カウンセリング研究, 24 (2), 123-127.
- 古市祐一 1993 登校拒否の発生要因を再検討するーストレス理論からのアプローチ 児童心理, 47, 741-746.
- Garmezy, N., Masten, A. S. & Tellegen, A. 1984

- The study of stress and competence in children: a building block for developmental psychology. *Child Development*, **55**, 97-111.
- 本城秀次 1996 「不登校気分」とは何か 児童心理, **660**, 750-756.
- 池田由子・上林靖子・河野洋二郎・西川祐一 1986 登校拒否と社会病理—中学生の精神衛生から 社会精神医学, **9**(1), 3-8.
- 上林靖子・中田洋二郎・藤井和子・北道子・池田由子 1990 中学生の欠席に関する研究—不登校の早期対応のために— 小児の精神と神経, **30**(1・2), 15-23.
- ラザルス R. S., フォルクマン S. 本明寛・春木豊・織田正美(監訳) 1991 ストレスの心理学—認知的評価と対処の研究— 実務教育出版 (Lazarus, R. S., & Folkman, S. 1984 Stress, Appraisal, and Coping. New York: Springer Publishing Company, Inc.)
- Leavy, R. L. 1983 Social support and Psychological disorder: a review. *Journal of Community Psychology*, **11**, 3-21.
- 圓山一俊・西ゆか 1992 登校拒否と自殺, 家庭内暴力, いじめ・いじめられおおよびその背景 社会精神医学, **15**(2), 109-117.
- 松本茂幸・野上憲彦・中野俊明・古賀靖之・陣内咲子・伊藤啓介・原紀子 1982 登校拒否の疫学的研究—佐賀県における実態調査— 九州神経精神医学, **28**(2), 132-140.
- 三川俊樹 1988 青年期における生活ストレスと対処行動に関する研究 カウンセリング研究, **21**(1), 1-13.
- 森田洋司 1991 「不登校」現象の社会学 学文社
- 森岡由起子・生地新・渡部由里・栗野美穂・井原一成・柏倉昌樹・高橋誠一郎・佐野琢也・井上勝夫・林博史・十束支朗 1991 思春期の行動・情緒障害の発症要因についての臨床疫学的研究(第2報)—臨床事例と一般中学生の比較とストレス対処行動を中心に 安田事業団研究助成論文集, **27**(2), 142-151.
- 村瀬嘉代子 1988 不登校と家族病理—個別的にして多面的アプローチ— 児童青年精神医学とその近接領域, **29**(6), 374-389.
- 長根光男 1991 学校生活における児童の心理的ストレスの分析—小学4, 5, 6年生を対象にして— 教育心理学研究, **39**, 182-185.
- 岡安孝弘・嶋田洋徳・丹羽洋子・森俊夫・矢富直美 1992 中学生の学校ストレスの評価とストレス反応との関係 心理学研究, **63**(5), 310-318.
- 岡安孝弘・嶋田洋徳・坂野雄二 1993 中学生におけるソーシャルサポートの学校ストレス軽減効果 教育心理学研究, **41**(3), 302-312.
- 大河原美以 1994 登校意欲に関わる母子間の「コミュニケーションの不全感」 家族心理学研究, **8**(1), 1-12.
- 皿田洋子 1992 中学生のストレス 教育と医学, **40**(11), 1016-1022.
- 嶋信宏 1992 大学生におけるソーシャルサポートの日常的ストレスに対する効果 社会心理学研究, **7**(1), 45-53.
- 嶋信宏 1994 高校生のソーシャルサポートネットワークの測定に関する一研究 健康心理学研究, **7**(1), 14-25.
- 立木茂雄 1994 登校ストレスと家族関係—共分散構造分析による因果モデルの検証— 家族心理学年報, **12**, 50-65.
- 高橋隆一・野本文幸・奥村崇・中屋みな子 1988 中学生の精神保健実態調査—第一報— 児童青年精神医学とその近接領域, **29**(5), 326-349.
- 富田和己 1992 小学生のストレスと病態 教育と医学, **40**(11), 1009-1015.
- 友田貴子・北村俊則 1994 第一希望の大学の受験合格・不合格が入学後の軽症うつ病, 自覚的健康度, ソーシャルサポートに及ぼす影響について 日本社会精神医学雑誌, **3**(1), 33-38.
- 豊田秀樹・前田忠彦・柳井晴夫 1992 原因をさぐる統計学—共分散構造分析入門— 講談社
- Winfield, H. R., Winfield, A. H., & Tiggemann, M. 1992 Social support and psychological well-being in young adults: The multi-dimensional support scale. *Journal of Personality Assessment*,

58, 198-210.

渡辺直樹 1988 中学生の行動様式の因子分析による
構造解析—学校嫌いと関係因子— 精神神経学雑
誌, 90(2), 125-147.

Yeaworth, R. C., York, J., Hussey, M. A., Ingle,
M. E., & Goodwin, T. 1980 The development
of an adolescent life change event scale.
Adolescence, 15, 91-97.

頼藤和寛 1994 いま問い直す登校拒否—これからの
見方と対応— 人文書院

Young, J. G., Chiland, C., & Kaplan, D. 1990
Children Rejecting School and Society Rejecting
Children. In Chiland, C., & Young, J. G. (Eds.),
Why Children Reject School. New Haven Lon-
don: Yale University Press. 3-15.

(1997.2.21受稿、1997.10.18受理)